

〔Ⅲ〕入門期における漢詩指導

鈴木 洋一郎

1 漢詩から何を学ぶか

生徒の読解指導を通して、漢詩に流れている詩人のものの見方、感じ方、考え方を学び、更に言語文化に対する関心を深め、人生を豊かに—人間形成しようとするのは、古典学習の目標である。多くの先賢たちの生活体験を物語り、その卓越した知性、豊かな教養で書かれた古典は、時代を越えて永く人々に感動を与え、人生の指針として、社会批判の警鐘として、文化創造の活力となってきたのである。

このものの見方、感じ方を深める国語学習の領域には、物語（小説）、随筆、詩歌などの文学的教材があり、鑑賞指導が重要な問題となる。特に詩—漢詩については、「詩は志を言ひ、歌は言を永うす。」（「書経」）また「心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。」（「詩経」）とあるように、人間の心の動きや感じたことをことばとして表したものが、「詩」であると言える。更に孔子は「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」（「論語」泰伯）と言い、詩に感興するところを人間修養、自己修養の出発点と考え、その子伯魚に対し、庭前で、「詩を学ばざれば以て言ふことなし。」（「論語」季氏）と言い「詩」を学ぶ必要性を教えている。

漢詩は、早くから、文学あるいはそれ以上に人間修養の書として重んぜられていたことが分かる。古来、漢の文、唐の詩、宋の詞、元の曲と言われ、唐の時代は特に漢詩が時代の文学の中心となっていた。唐詩にこめられた人々の「感じ方、考え方」を生徒に追体験させることは、人生を豊かにする態度を養うと言えよう。

2 漢詩教材としての唐詩

唐詩は中国文学の精華—漢詩が唐代に至って、絶句、律詩という近体詩に成長したのは、単に押韻や平仄の法則が確立し、形式が完成されたというばかりではない。文運の隆盛した時代、社会の中で、人々がそれぞれの立場で感動し、真剣に生き、その叫びの中から詩が生まれたのであり、唐詩を正しく読み味わうためには、当時の社会背景や詩人の生き方を知らねば

ならない。

唐詩最盛期は玄宗の治世——南北朝から隋の統一、やがて官僚文化が確立していくにつれて、古来うたわれていた詩（古詩）が形式、内容ともに整えられてきた。六朝の声律研究から律詩が生まれ、また民歌が絶句となって近体の律絶が古詩の型を含めて完成された。唐に至り、特に開元の治、玄宗の43年間の治世には、詩や音曲を好む皇帝に民心も倣い、唐朝の繁栄は極度に達した。官吏登竜門の科挙制度にも「詩」の試験が加わり、詩が官人に欠くことのできない教養となった。24才で科挙に下第した杜甫を始め唐の詩人たちは一様に仕官、出世を強く願い、時に臨み、天子の求めに応じて、「応制」の詩を競い、王朝を頌したのである。

時代に逆らいつつ超えた詩人たち—優れた詩人が必ずしも能吏でないことは杜甫や李白の一生を見ればわかる。盛唐の高適や晩唐の元稹、白居易などは比較的高官に上ったが、多くの詩人は下僚に沈潜していた。玄宗は外国の経略を好んだが、異民族の文化には理解をもちその摂取も積極的で、長安城は殷盛を極めた。しかし、安祿山の反乱を始めとして社会は混乱し政治も乱れて、国外への出兵も打ちつづいた。こうした時代の中で、困政を諷刺、批判し、戦争の無意味さを憤り、人民の悲惨な運命を訴える詩人たちがいた。

漢詩教材としての唐詩—詩人の感動を述べ表すという詩は本来叙情詩的なものである。漢詩においても、客観的な風景描写の叙景詩のものは少なく、前半の起、承句が叙景的であっても、後半の転、結句の叙情的な感興をつつみ、調和している。教科書に採られている唐詩を発想を中心として分類してみると、叙景的な詩、叙情的な詩、そして叙事的な詩となる。叙景的な詩は自然閑適にして隠棲の詩で世俗に超越して悠悠たる世界を逍遥するものであり、叙情的な詩は世相変転、動乱する時流の中、流離の家族を恋い、友人との惜別を歌う愛情溢るものであり、叙事的な詩は、政治の腐敗、社会の混乱を人民とともに憤り、うちつづく外敵との戦争の無意味さを痛恨と激怒とをこめて描くものである。

3. 漢詩の鑑賞指導

漢詩を「教材」として指導するには、古来、愛唱されてきたもので、生徒の古典入門期には、特にその能力や興味、関心に応ずるようにし、詩の形式も絶句から始めて長編の古詩へと及ぶようにするのが望ましい。

入門期における漢詩教材

入門期の指導は古典への学習意欲を起こさせることに重点をおくべきであり、その教材の選定にあたっては、中学校教材を調査し次のような諸点に注意した。

1. 用語の平易さ、訓点の簡易さ
2. 題材や主題が理解しやすいこと

絶句は律詩や古詩に比べ、返り点がレ点か一、二点くらいであり、読みやすく、用語も比較的平易である。また題材も入門期の「春」に関係のあるものや旅情、友情のようなものは理解されやすい。更に当用漢字を多く用いているものにも注意して選んでみる。

- (1) 春の詩…杜甫の「絶句」「春望」
孟浩然的「春暁」 杜牧の「江南春」
- (2) 友情の詩… 李白の「早発白帝城」
王維の「送元二使安西」

(一) 春の詩の指導

絶句	杜甫
江碧鳥逾白	山青花欲然
今春看又過	何日是帰年
春暁	孟浩然
春眠不覚暁	処処聞啼鳥
夜來風雨声	花落知多少
江南春	杜牧
千里鶯啼緑映紅	水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺	多少楼台煙雨中
春望	杜甫
国破山河在	城春草木深
感時花濺淚	惜別鳥驚心
烽火連三月	家書抵万金
白頭搔更短	渾欲不勝簪

四編ともに唐詩で、教科書中の秀作。「春望」は絶句でないが、生徒は読み慣れているので、抵抗感はあるまい。その上、春という季節感からも理解できる内容と表現とをもっている。「碧、逾」「啼」「鶯、啼」「戱、烽、搔、渾、簪」以外はすべて当用漢字であり、「返り点」も簡単である。

入門期の漢詩の指導目標を次のように考える。

- ア、読みやすい詩で漢文口調に慣れる。このために身近かに感じられる季節（春）や自然の風光を題材とした詩を読ませる。
- イ、訓読に慣れ、暗唱できるようにする。基本的な

訓読法を理解させる。

- ウ、作者の感動（詩の主題）が分かるようにする。
作詩した時代背景や社会情勢については、詩の理解や鑑賞のときに説明する。

○指導の実際

入門期に当っては朗読の指導を第一に行う。漢詩は文に比べて短く、完結している作品であるから、補助教材も準備しやすいので、プリントし、朗読の練習をすることができる。前掲の三つの絶句は、一時限で朗読指導を終え、「春望」の律詩は宿題かまたは補助教材にまわしてもよい。

<読みの指導>

1. 朗読
ていねいに、範読を2回した後に生徒に指名読をさせる。五言の詩は二・三、七言の詩は、四・三と区切って読むように注意する。
2. 漢字漢語とその意味
「絶句」… 逾_マ 看_ミ (おどり字) 然、是 欲 (無生物が主語のときの意味)
「春暁」… 不 (打消) 多少
「江南春」… 江、紅、山郭、多少
3. 送り仮名と読
○碧_ニテ 青_クテ 然_エトス 帰年_ナラフ
○暁_マ、啼鳥_マ、落_ルコト 八十寺(ハッシンジ)
4. 返り点
簡単な訓点の説明にとり、押韻や起承転結などは後日に指導する。

<鑑賞の指導>

漢詩の鑑賞には、次の5点に注意して指導する。

1. とき……作詩の時、季節、年齢
 2. ところ……場所、環境
 3. 表現と感覚
 4. 作者の感動
 5. 諷刺
1. とき
「絶句」… 広徳2年(764年)春、53才
「春暁」… 不明、春、家の寝床
「江南春」… 江南での役人生活(29才~31才、36才~39才)は2回、36才ころの作、
 2. ところ
「絶句」… 成都の錦江(揚子江の支流)畔の浣花草堂。節度使嚴武に認められ、生涯中最もゆとりがあり、生活も安定していた。
「春暁」… 不明
「江南春」… 南京(南朝の首都建康)の南にある宜州の司令部幕僚、この辺りは気候温暖な水郷地帯で美しい農村風景が展望された。
南朝という華やかな時代の栄華の跡を秘めた

古都に近く、仏寺も数多い。

「春望」 反乱の安祿山軍（胡軍騎兵）に捕えられ、古鎮中の長安城内に軟禁された。

3. 表現と感覚

「絶句」…前半は叙景で、色彩感として「水碧に白鳥」「青山に花然（紅）」などのコントラストが絶妙。後半は叙情で、前半の明るい景色から一転して深い詠嘆、沈痛感がある。叙景の中に融けてこむ叙情という唐詩の一つの表現法に注意。

「春曉」…前半は、聞くともなしに聞く鳥の声、外のさわやかな感じ。第3句では昨夜の風雨の連想か暗いイメージをもたせるか、第4句で、落花惜春のやるせない情感を表現している。花と鳥とは明るいイメージ。

「江南春」…前半は、広大でのどかな田園風景、聴覚（鶯）、視覚（緑、紅、酒旗の赤）旗風には触覚（肌を感じる心持ちよい微風）がある。後半は、「春曉」のように一転し、懐古という叙情的な表現をして、結ひては、叙情と叙景とが渾然一体となって春雨に煙り、しっとりどぬれた江南を描いている。時間の経過—歴史—を諸景物の上に重ね、色彩感豊かな印象派絵画の風情である。

「春望」 詩の構成を考えると、首連では、国都破壊による人丁の空しさと変わらない自然とをとりあげ、続いて韻連からは次の表のように、公（国家）と私（家族と自分）のことを述べている。

連	公	私
韻	国家混乱，花も涙の種	家族を案ずる
頸	戦争継続，乱世への嘆き	一家離散
尾	国家に役に立たぬ嘆き	迫りくる老年

最後の「簪に勝えず」とは「仕官するときの冠も簪（ピン）で留められない」ほどであるといえ意味で、仕官への絶望を表す。46才で老境迫り来るとは言えないか、仕官を求めて公私ともに流離した年月は数十年の重みと疲労とかある。

4. 作者の感動

作者か何に感動して、詩を作ったかを考えさせることは鑑賞の中心であるから、全訳する前に、生徒に発表させる。例えば、「絶句」には春の日の望郷の心、「春曉」にはのどかでものうい春の朝、「江南春」には晴雨ともによい江南の春景色。「春望」には、輝く開元の文化の中での国都の戦乱による崩壊と肉親の別離への悲哀、感傷など理解

されればよい。

5. 訳詩

漢詩を口語の訳文に直してみることは必要であるが、詩は詩を以て味わうとい観点から、自由にその訳を作詩させる。唐詩のもつ平仄の音韻感とか、押韻やリズム感を生かした口語訳は作れなくても、作者の感動をこめた詩が出来るようになればよい。予め、土岐善磨氏の「鶯の卵」や佐藤春夫氏の「玉笛譜」などを参考資料として訳詩に添えたり、生徒の訳詩をOHPに写したプリントにして朗読させる。

(二) 旅情，送別友情の詩の指導

早発白帝城	李白
朝辞白帝彩云间	千里江陵一日还
两岸猿声啼不住	轻舟已过万重山
送元二使安西	王维
渭城朝雨浥轻尘	客舍青青柳色新
劝君更尽一杯酒	西出阳关无故人

李白、王维ともに盛唐の8世紀という同時代に生きた詩人である。旅情と友情の詩を採りあげたのは、生徒たちは中学校の友と別れ、高校での新しい友達を求めているときである。この時期の生徒には李白の詩が揚子江を、王维の詩が黄河（渭水は黄河の上流）と中国文化に関係の深い二つの長江を背景にして、あるいは旅をつづけ、あるいは塞外へと心を馳せる浪漫的詩情も理解できると思う。この二つの唐詩は漢字も読みやすく、李白の「啼（既習）猿，已」王维の「渭，浥，塵」ぐらいが当用漢字外のものであり、これらは板書して指導する、概して漢字の抵抗は少ない。

○指導の実際

< 読みの指導 >

1 朗読

春の詩の朗読と同じ順序で指導する。

2 送り仮名と漢語

○修飾語と被修飾語についての送り仮名

連用修→述語（送り仮名に「ニ」）

早_ニ発_ス 朝_ニ辞_ス 一日_ニ還_ル
更_ニ尽_ス 西_ノ出_ル

連体修→体言（送り仮名に「ノ」）

彩_ノ雲_ノ間_ノ 千_ノ里_ノ江_ノ陵_ノ 両_ノ岸_ノ猿_ノ声_ノ
万_ノ重_ノ山_ノ 渭_ノ城_ノ 朝_ノ雨_ノ 一_ノ杯_ノ酒_ノ

○漢語

早（ツト）_ニ 朝（アシタ）_ノ 往（ヤ、トト）_ル
不（サ）_ル 浥（ウルホ）_ス 新_{タリ}
尽_ル（命令形） 出（イ）_ル、〔已然形で仮定を表す、〕 無_カ、〔假定法の呼応として推量、〕

七言の詩は「四字・三字」と区切り意味をまとめて読む。無(有)などの述語は主語(ここでは故人)の上にくることに注意する。

鑑賞の指導>

1. と き

李白…乾元3年(759年)3月59才

王維…不明, 開元25年(737年)ごろに辺塞に勤務したので, 30才代の作か, 季節は春である。

2. と ころ

李白…この年, 肅宗に罪を得て, 夜郎国(貴州)に流される途中, 巫山で赦免の報をうけて白帝城から乗船する。途中三峡の険で猿声を聞き一気に江陵まで長江を下った。「白帝城」は, 前漢の末, 築城に当り, 井戸の中から白竜が出たので公孫述が「白帝」と自称したことに由来し, また, 「白」は蜀が西方(五行説では西は白)に当り, 東の漢の火(赤)に勝つための水(白)をも意味するともいう。

王維…「渭城」は, 長安の西北部10キロにあって, 渭水に臨んでいる。秦の旧都咸陽の地であり, 漢以後は渭城となる。西域へ行く旅人の惜別する所である。「安西」(新疆省吐魯蕃トルファン)は, 唐の時代西域を守る六都護府(行政, 軍事)の一である。後には, 更に西の方へ移り, 天山山脈の麓の龜茲(庫車県)に置かれた。「陽関」は, 玉門関の陽(みなみ)で敦煌島の南西に当る。この詩ではこれら地名の関係を十分に説明する。

3. 表現と感覚

李白の詩では, まず数字, 色彩の対応について, 特に数字「千と一」「兩と万」によって距離や時間を効果的に印象づけ, 「緑の山, 青い川」に対し「白帝」「彩雲」など鮮やかな色彩感に注意させる。この点, 前出の杜甫の「絶句」の詩にも似ている。第三, 第四句は, 李白独特の誇張した表現で, さわやかな朝焼けの中での船出と赦免になった解放感とが重なり, その感動が舟にスピードを与え一気に江を下らせてしまったのである。なおこの詩の補助教材として例えば, 次の李白の作品を与えるのがよい。

黄鶴楼送孟浩然之広陵 李 白
故人西辞黄鶴楼 烟花三月下楊州
孤帆遠影碧空尽 唯見長江天際流

王維の詩では, 第一, 第二句で, まず静かでさわやかな朝に, 柳を描き出し送別の場面をつくる。渭水の覇橋のたもとで柳の枝を贈るのは, 旅立つ人への習わしである。「楊柳をあまりた

くさん人が折るので手の届く所に枝がなくなった。」という詩もある。「楽府」の曲名にも別離の歌として「折楊柳」がある。第三句では別れの寂しさを暖かい思いやりで包んでいる。昨夜から飲んで語り尽くしたはずだが, 今朝の別に際しての「更」^ニと言い重ねる心情を理解させる。第四句は, 別れた後の元二の心情を思いやったものである。古来この詩は, 「陽関曲」「渭城曲」(「楽府詩集」)などと言われ, 「唐人餞別に必ず陽関三疊を歌ふ」(宋の謝枋得)のも有名で, 「無^{カラシ}無^{カラシ}故人無^{カラシ}…」と, 送別の宴では朗詠されている。この詩では悲しいとか寂しいとかいう語がないことかかえて別離の情一人悲しいものになっている。これら表現上の苦心, 含蓄の深さを味わうようにする。

4. 作者の感動

李白の詩……昨日まで罪人として江を上ってきたのに比べ, きょうの下り舟の速かったことは単に水の流れのせいばかりではない詩人の気持ちを味わさせる。この詩を「……絶句中にても最も傑出したものにして千古の絶唱というへし。」と賞讃する人もいる。

王維の詩……静かな朝のさわやかさと別離の寂しさの中に出発する友を励ましている。前半の自然の描写が後半の惜別の情の中に流れて溶け込み, 直接に語りかけるような表現法で, 作者の感動を訴えている。

4. 指導の評価, 反省

授業中の教師の問いかけ, 生徒の応答や簡単なテストなどによって学習目標を達成しているかどうか判定し今後の反省にするか, 次のような事項にも注意する。

1. 唐詩朗読に対する興味はどうか

入門期なので難読の漢字も少なく, 返り点も簡単であり, 短い詩なので, 朗読回数も多くとれるはずである。しかし高校入学後で文語体にも慣れていないので, 漢詩口調を興味づけるのは難しいように思われる。

2. 送り仮名と返り点のつけ方は分かったか

読みやすい唐詩を選んだが, 漢文独特の送り仮名であるので, 漢字の読みとの関係にも注意させる。難読の漢字には正しい送り仮名がつけられないこともある。返り点はレ点と一二点なので問題は少なかったが, 客語や補語から返るときの送り仮名の「ヲ」「ニ」「ト」の練習は例文を書いて指導する。

唐詩は最も洗練された漢詩であり、古詩に比べると完成された芸術詩である。絶句や律詩を読みながら、第一句、第二句……と各句の相互関係が分かったどうかに注意し、また描写した景色の中に作者の心情を表現しているという経過も十分に理解できたかどうか。

4. 詩の表現の技法と感覚とは把握できたか

詩人が作詩に当り、いかに表現に苦心しているかという技法や詩にこめられた鋭い感覚を発見、把握することは鑑賞の第一歩であろう。入門期のこの六編の作品各句を構成する用語のうまさ、観察感覚の細かさかわかるように指導する。

5. 作者の「感動」は十分に追求できたか。

訳詩－口語の自由詩でもよい－はできたか。

詩の主題を考えさせる問題であり鑑賞の中心でもある。主題の理解には作者の境遇や時代背景の知識も必要であるが、詩の題名から、その動機のはわかるものもあり、「絶句」のように詩の主題の追求しやすいものもある。口語訳の詩は余り形式にこだわらず、意味のわかるのびのびとしたものを書いてよい。

5. むすび 今後の問題

叙景的叙情詩の発想に注意しよう。

入門期の教材として、「春」「旅情、友情送別」の六編を採り上げたか、いずれも叙景的な詩の中に心情が叙へられておりこれらは、漢詩の発想の一般的なものと言いうる。長江や大湖の広さを叙へるものから庭前草花の小景の中に、詩人の感懐を述べているものである。

補助教材として、王維の「鹿柴」「竹里館」、李

白の「山中問答」、杜牧の「山行」、柳宗元の「江雪」などを用いるのがよい。

次に「旅情、友情送別」の詩には、孟浩然の「送杜十四之江南」、李白の「贈汪倫」「送友人」などがあるが、更に発展して、杜甫の「登岳陽樓」「旅夜書懷」「登高」の教材を用いるのもよい。

叙事詩的叙情の漢詩のすばらしさを味わおう。

于翰や王之涣の「涼州詞」や岑参の「磧中作」、王昌齡の「出塞」などの詩である。既に入門では、「春望」や「陽関三疊」の詩を読んだが、これらはいずれも異境の空の下で、再び長安城に帰れない悲しみを歌ったもので「古來征戰幾人回」とか「万里長征人未還」の悲壯感や「春光不度玉門関」の沈痛感、更に長安の秋月を眺めながら西域の夫を偲ぶ妻の悲しい心（李白の「子夜呉歌」）もある。これらの詩がいずれも玄宗治世下に生まれたもので、その時代、社会への関心をよひおこさせる。玄宗は、唐室の復興を図り、即位後開元、天室の40年間に5回も中央アジアへ出兵し、シルクロードの確保、外国文化の摂取につとめた。しかしこの皇帝の権力をもって経済大国として繁栄した背後には、国境辺塞での無名戦士の悲調の軍歌あり、国内での民衆の歎きと憤りの叫びがあった。これらの幾編かの詩は今もなお、我々に強い感動を与えている。

漢詩の意義を知り、興味をもたせよう。

高3の古典Ⅱ漢文の最初の時間に、漢文教材を、経子類、文章類、詩、史話と分類し、興味調査をしたが、詩と史話への興味が多数であった。この結果に基づき、入門期には、単に訓点や文法、朗読解釈だけに終らず、漢詩への興味、感動を育みながら、それを漢文学習の出発点とすることかてきる。